

ラスタファリアニズムとブラックムスリムに おけるアフリカの記憶

上 間 励 起

本発表の目的は、「ブラック・ディアスポラ」と呼ばれる新世界に離散したアフリカ系の人々による宗教運動、中でもジャマイカのラスタファリアニズム運動とアメリカのブラックムスリム（ネイション・オブ・イスラム）を取り上げ、両宗教運動において信仰者の民族的な起源である「アフリカ」が如何に表象されているのかを比較・考察することである。「ブラック・ディアスポラ」は、アフリカ系の人々の離散を指す言葉であるが、この言葉を生物学的な区分（race）としての黒人種の離散ではなく、歴史や文化を共有する同属意識を持つ民族的（ethnic）な集団の離散として定義する。人種という概念は各々の社会においてその内実が異なっており、例えば、アメリカで黒人種と見做される人が、キューバでは白人種と見做されることがある。アメリカにおいては「一滴の血」という概念が存在しており、それは先祖にアフリカ人がいた事が確認できた場合、例えば外見が白人種と変わらないとしても黒人種として見做される事がある。そのため「ブラック・ディアスポラ」の宗教を比較研究する際、「人種」という概念を使用する事はある程度有効ではあるが、限界があると考えられる。ゆえに「ブラック・ディアスポラ」は、人種的なものと言うよりも、文化的なものとして考えることにした。今回事例として取り上げたラスタフ

アリアニズム運動とブラックムスリムは、単に「ブラック・ディアスポラ」の宗教という共通点のみならず、多くの類似した歴史的背景やコスモロジーを持っており、主に奴隷制度の記憶、異郷における人種差別等の苦難、世界宗教との接触等があげられる。両宗教は一九三〇年代に発生しており、共にマールカス・ガーヴェイの思想やエチオピアニズムを含むキリスト教の影響を強く受けている。また、「異郷」で白人に抑圧されている黒人は、受肉した神であるエチオピアの皇帝ハイレ・セラシエ一世や、ブラックムスリムの創始者ウォレス・ファードによって救済されるという千年王国論的な神学を持っている。ラスタファリアニズム運動においては、ガーヴェイの思想をダイレクトに継承し、聖書に記述されている古代エチオピア（ザイオン）を全ての黒人のルーツと見做し、そこへの身体的な帰還によって救済が達成されると考えられている。しかしながら一九七五年に皇帝が死去したことによって、多くの黒人大衆の文化的遺産を継いでいるジャマイカを神学的な理想郷として「アフリカ化」とするという思想が生まれた。しかしながらこの思想は、アフリカ帰還の頓挫という事ではなく、黒人はエチオピア人であるという真実に目覚めていない者達を救済するために、ジャマイカに敢えて留まっていると考えることが出来る。ラスタファリアニズム運動の黒人観は、信仰問わず抑圧されている全てのアフリカ系の人間を包含しており、汎アフリカ主義的な特徴を持っている。一方ブラックムスリムにおいては、その信者がアフリカ系で構成されているにもかかわらず、アメリカにおける伝統的な黒人文化や、サハラ以南のブラックアフリカを

蔑視している傾向にある。ラスタファリアニズム運動と異なり、ブラックムスリムは「アフリカ(エチオピア)系」ではなく、「アジア系」としてのアイデンティティを前面に押し出しており、汎アフリカ的なアイデンティティを否定している。また教団は分離主義を掲げており、ブラックムスリムの神話的過去におけるメッカのような黒人のみの国を建国しようとしている。それはラスタファリアニズム運動が掲げるような特定の土地への帰還というよりも、過去への回帰である。重要なことは、両宗教において、奴隷制度の記憶を乗り越えるために実際のルーツである西アフリカの記憶が完全に忘却され、別の民族的な記憶が神学的に想起されているということである。

アンテベラム期アメリカの 宗教とジャーナリズム

佐藤 清子

アンテベラム期のアメリカ合衆国は、信仰復興が盛り上がりを見せた福音主義の時代であると同時に、移民の増加によるカトリック教会の成長が著しい時代でもあった。二十世紀半ばに至るまでに、アメリカ合衆国はプロテスタントが主流を占める社会から、宗教的多様性によって特徴付けられる社会へと変遷を遂げるが、変化は単なるなし崩しの多様性の増加によってのみならず、それを積極的に肯定する議論の成熟によって後押しされていた。そうした議論の発展は、反カトリック主義が高ま

るアンテベラム期において既に見いだすことができる。

本発表は、ジェームズ・ゴードン・ベネット (James Gordon Bennett) が一八三五年から編集・発行した大衆日刊新聞、『ニューヨーク・ヘラルド (The New York Herald)』における、カトリックとプロテスタントの対立の取り扱いに注目する。ベネットは、多数派であるプロテスタント、特に福音派のプロテスタントが、合衆国の文化や道徳をプロテスタンティズムによって規定しようとした時代にあつて、それとは異なる視点で宗教問題を扱った。ベネットのカトリック教徒としての背景は、彼の宗教への態度に影響していると考えられるが、彼は同時にカトリック教会からも距離をおいて、時にプロテスタント以上に痛烈なカトリック教会批判を行っている。

『ヘラルド』は、反カトリック主義者がカトリック教会のスキャンダルをでっちあげた「マリア・モンク事件」に際しては、反カトリック主義者を批判し、アメリカ合衆国を、カトリック、プロテスタント双方が自由な宗教活動を行うことの出来る空間として特徴付ける議論を展開した。その一方、一八四〇年代、ニューヨーク市の学校における、プロテスタント的宗教教育に対してカトリックが反発し、教区学校への公的予算配分を求めた「学校問題」に際しては、『ヘラルド』は、カトリック教会のニューヨーク司教、ジョン・ヒューズが、政教分離原則を冒して政治の領域に踏み込んだとして、厳しい攻撃を加えた。この見解は、公共空間を宗教的に中立なものと定義づけようとする点において、マリア・モンク事件以来一貫しているといえる。しかし同時に、この件に関するベネットの立場は反カ